

## 令和5年度第1回春日市総合教育会議議事録要約

### 1 開会及び閉会に関する事項

- (1) 日 時 令和6年2月14日(水)  
開会 午前9時  
閉会 午前10時50分
- (2) 場 所 春日市役所議会棟全員協議会室

### 2 出席者(構成員)の氏名

市長	井上澄和
教育委員会 教育長	扇弘行
委員	安本誠一
委員	染原レイ子
委員	宮崎泰三郎
委員	足達好子

### 3 構成員を除き会議に出席した者の職氏名

副市長	佐々木康広
経営企画部長	藤井謙一郎
教育部長	金堂円一郎
こども支援部長	生田久仁子
経営企画課長	貴島宏一
教育総務課長	武末竜久
学校教育課長	今福保幸
地域教育課長	萩原裕之
こども未来課長	小池八太
子育て支援課長	武末克枝
子育て支援課主幹	岸川江津子
昇町保育所長	松田加寿子
学校教育課指導主事	八尋智之
学校教育課長補佐	春日昇
教育支援センター長	木村博喜
春日野中教育相談員	萬豊彦

### 4 議事の内容

別紙

午前9時 開会

○藤井部長

皆さんおはようございます。ただいまから令和5年度第1回春日市総合教育会議を開催いたします。私は、本日の会議の進行を務めさせていただきます経営企画部の藤井と申します。どうぞよろしくお願いいたします。本日、1名の方が傍聴を希望されておられますが、傍聴いただくということでご了解いただけますでしょうか。ありがとうございます。それでは、開会にあたりまして、会議の主催者でございます、春日市長の井上澄和が、ご挨拶を申し上げます。

○井上市長

改めて皆さんおはようございます。市長の井上澄和でございます。令和5年度第1回春日市総合教育会議を招集させていただきましたところ、教育委員の皆様には、公私ともに御多用の中、御出席を賜り、誠にありがとうございます。初めに今年は、元旦から能登半島で大きな地震があり、多くの尊い命が奪われました。その翌日には、被災地の救援に向かっていた海上保安庁職員が、航空機事故でお亡くなりになりました。犠牲になられた方々の御冥福をお祈りいたしますとともに、被災された皆様に心からお見舞いを申し上げます。市としましても直ちに市民の皆様に義援金を呼びかけたり、市の見舞金を石川県にお送りしたところがございますが、御承知のとおり、先日、春日東小学校の児童たちが委員会活動で集めた義援金19万円あまりを市がお預かりして、石川県にお送りしました。このことが多くの報道機関で紹介され、感動の輪を広げたところがございます。子どもたちからずっしりと重い義援金箱を受け取り、改めて本市の教育行政の成果とコミュニティスクールで育った子どもたちの市民性の高さを実感したところがございます。

さて、昨年度の総合教育会議で御説明しましたとおり、令和5年4月1日から、市の組織の大規模な見直しを行っております。市民図書館や文化財などに関する事務を教育委員会から市長部局に移す一方、放課後児童クラブに関する事務は、小学校との連携を深めるねらいで市長部局から教育委員会に移しました。これらの見直しによって、教育委員会の事務を子どもに重点化し、市長部局には、子どもに特化したこども支援部を設置したものでございます。この新しい組織体制のもとで、教育委員会と市長部局がこれまで以上に連携し、子どもたちのよりよい育ちにつなげていくことができると考えておりますので、引き続き、教育委員の皆様のお力添えを賜りますようお願いいたします。

本日のテーマは不登校対策の現状と今後の展望でございます。不登校は決して小中学校9年間だけの問題ではなく、就学の前後問わず、発達障がいや子育て支援のあり方にも大きく関わっており、教育と福祉の連携が特に必要になるものでございます。まさに総合教育会議にふさわしいテーマではないかと考えております。本日はこども支援部の部課長も参加しておりますので、教育委員の皆様としっかり意見交換をさせていただき、同じ方向を共有できるよう、活発な議論をお願いして、私の挨拶といたします。どうぞよろしくお願いいたします。

○藤井部長

それでは、会議の趣旨と流れについて説明させていただきます。お手元の次第の方を御覧いただいてよろしいでしょうか。次第の2番、本日の会議主題を、不登校対策の現状と今後の展望とさせていただきます。また、目的につきましては、不登校対策における本市の現状及び課題について共有し、今後の市の方針について意見交換をすることで、

市長と教育委員会とが連携して、効果的な教育行政及び、子ども子育て支援行政を進めるための基盤構築の一助とすることとしております。会議の流れでございますが、こちらの次第の3番に記載しておりますとおり、まずは1時間程度、現状報告と事例発表をさせていただき、その後、意見交換をさせていただければというふうに考えております。

事例発表につきましては、教育支援センターの木村センター長と、春日野中学校の萬教育相談員にお願いしております。いずれも本市の不登校対策の最前線を担っていただいておりますので、より具体的なお話が伺えるものと思っております。それでは早速現状報告事例報告に入らせていただきます。

まず、本市の現状と対策の概要につきまして、学校教育課の春日課長補佐から説明させていただきます。よろしくお願いいたします。

#### ○春日課長補佐

学校教育課学校教育担当の課長補佐をしております春日と申します。よろしくお願いいたします。本日は、不登校対策の現状と今後の展望というテーマでお話をさせていただきます。まず初めに、私から、本市の不登校の現状と対策の概要についてお話をさせていただきます。そのあとに事例発表で、中学校のスマイルルーム、教育支援センターのマイスクールにおける状況につきまして、実際に支援に関わっている職員から説明をさせていただきます。現場の状況をお伝えするととても貴重な機会だと思っておりますので、私の話は、短めにいたしまして、お2人にバトンタッチを早めにしたというふうに思っております。では説明を始めさせていただきます。

まず、そもそも不登校児童生徒というものの定義について説明をさせていただきます。制度上は、その年度の間、30日以上登校しなかった児童生徒のうちで、何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因背景により、児童生徒が登校しない、あるいはしたくてもできない状況にあるものというふうにされております。4月から新年度を迎えて、欠席日数が積算されていまして、その子の欠席日数が30日を超えた時点で不登校というカウントがされます。欠席日数が30日を超えてカウントされてしまうと年度途中で学校に復帰してもそれまでの欠席日数が減るということはありませんので、不登校児童生徒数の数がカウントされたままになるということになっておりますので、集計上、不登校児童生徒が年度途中で減るといったものはないと、右肩上がりにどうしても増えていってしまうというふうに認識していただければと思います。3月末で一旦リセットして、また次の年に入るという形になっております。

次に、春日市の不登校児童生徒の数の状況でございます。この折れ線グラフを見ていただくとわかりますが、令和2年度に一旦、それまでの取り組みの成果とその時のコロナの影響もあって、一旦数が減りましたが、その後また増え始めております。ここで気になる点は、小学校、下の方ですけれども、赤い線の下の小学校の児童生徒の数が増えているという点です。コロナ前の令和元年が94人であったものが、令和4年度には166人になっておりまして、約1.8倍になっております。その中でも、小学校1、2年生が令和4年の166人のうち、実は22人になっておりまして、これは以前にはなかった状況でございます。つまり不登校の低年齢化が進んでいるということになります。また、増加の要因として、コロナの拡大期に、休校、学級閉鎖が繰り返されたことで、休むことへの抵抗が弱まってしまったといったことも考えられております。次に、この不登校の要因の資料でございます。御覧のとおり、無気力不安が、小学校、中学校ともに一番多くなっております。その子の現状が無気力不安であるということがどうしてもここに出てきてしまうというのも考えられるんですが、その子が実際に最初のきっかけになったのは本当はもっと別

にあったのかもしれませんが。2以下を見ていただくと、親子の関わり方、生活リズムの乱れといった家庭環境に課題を抱えているケースも非常に多くなっています。また、不登校児童生徒の多くが、現状として、自尊感情が低下している、登校するためのエネルギーが枯渇しているといった状態にあります。つまり、周囲の元気な人から見れば、何で学校に行けないのと思っても、どうしても本人のバッテリーが減ってしまっていて、思ってもどうにも体が動かないといったこともあるということです。なのでそういうときはですね、無理にどうこうすることはせずに、待つしかないといったこともあるということです。これは、私が教育委員会に赴任した当初に指導員さんからいろいろお話を聞いた中で、なるほどなどはっとした言葉だったので、とても印象に残っております。

では次に、本市の不登校対策の概要について御説明いたします。その説明をする中で、学校内の支援と学校外の支援というふうに2つに分けてお話をさせていただきたいと思っています。まずは、学校内における支援です。まず初めに、子ども、保護者と相談、情報共有といったこととなりますが、これは当然ながら最初は、担任の先生をはじめとした生徒指導主事や教育相談員、養護教諭などの学校の先生が連携して、児童生徒や保護者と相談しながら、登校できるように支援していくというものです。その次の段階として、スクールカウンセラーなどの専門家による面談というものがあります。スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーといった専門家を配置しておりますので、その専門家の面談を実施して、アセスメントや支援の方策について、不登校対策等委員会などで助言をさせてもらっています。最後に、校内の不登校対策委員会などのケース会議で、それまでの情報を踏まえて、支援の方法などを検討していくといった流れになっております。では次のページです。学校内における支援につきまして、これらの会議を踏まえて具体的に対応していくことになるんですけども、その支援の例になります。まず、マンツーマン方式による対応です。これは先生といったらどうしても担任の先生が第一番に来てしまいますけれども、対応する先生を担任の先生に限定せずに、その子と最も信頼関係がある教職員、その人を担当者にして支援をしていくという方式になっています。この担当者が、定期的に教育相談や家庭訪問を実施して、その状況を関係者で共有していくといった流れになっています。その下の段の丸のところですけども、スマイルルームの別室登校方法です。学校の教室に入ること自体にどうしても不安を抱えて1歩前に進めないといった子どものためにですね、学校内で教室ではなく別室でスマイルルーム、教育相談室、保健室などの場所を確保して、その不登校の子どもの居場所をまず設置して、専門職員である教育相談員が中心となって、暖かい雰囲気を作って迎え入れたり、個別に指導を行ったりします。こちらにつきましては後程、春日野中の教育相談員の萬先生から、実際の状況の説明をしてもらおうと思っております。

では次のページに移ります。学校外の支援についての説明をさせていただきます。どうしても学校には足が向かないという子どもに対しては、春日市の教育支援センターのマイスクールを紹介しています。この教育支援センターはマイスクールの運営をするということに加えて、市全体の不登校対策の中核機関として、その総合的な推進を行っております。マイスクールの運営につきましては、また後程、木村センター長から説明がありますので、ここでは割愛をさせていただきます。一番下の総合的な不登校対策の推進としましては、市全体の不登校の状況把握・分析をするとともに、専門スタッフと各学校の担当教員を定期的に教育支援センターに集めて、研修や情報交換を行うことで、市全体の対策支援のレベルを底上げするという役割を担っております。

次のページです。ここまでお話しました不登校対策を簡単に図にしたものになります。学校があって、そこには通常の学級、特別支援学級があって、その次の段階として、スマ

イルルーム、教育相談室といった別室があり、その学校の外に教育支援センターのマイスクールがあるとといった3層構造をイメージしていただければいいかなと思います。学校と教育支援センターは相談助言をする関係性にあり、教育相談員をはじめとした専門職員が、それぞれの場所に働きかけを行いながら、春日市の不登校対策が進められているということになります。ここまでが春日市教育委員会として実施している不登校対策の簡単な概要の説明になります。

最後に、春日市教育委員会が設置しているものではありませんが、その他の施設や民間団体について簡単にご紹介いたします。まず、学びの多様化学校です。つい最近までは、不登校特例校と言われていましたけれども、最近呼び方が学びの多様化学校となっています。これは全国に24校ありまして、公立が14校、民間が10校です。九州に現在あるのは、鹿児島県の民間の高校1校だけになっています。次はフリースクールです。主に居場所として活用されておりますけれども、学校復帰を目標としていない点が、先ほど紹介しました、教育支援センターのマイスクールとは大きく異なる点かなと思います。フリースクールを利用している児童生徒に対しては、市教委としては一定の基準を満たしていると判断できる場合は、指導要録上、出席の取り扱いをするという対応をしております。私からの説明は以上です。では、スマイルルームとマイスクールの支援につきまして、それぞれの専門職員から説明をさせていただきます。

#### ○藤井部長

続きまして、春日野中学校のスマイルルームにおける支援事例についてでございます。春日野中学校の萬教育相談員からの説明になります。どうぞよろしくお願いいたします。

#### ○萬教育相談員

春日野中学校の教育相談員の萬です。よろしくお願いいたします。今から春日野中学校のスマイルルームにおける支援の状況ということで説明をさせていただきますが、教育相談員というのは、スマイルルームの担任ではありません。そのため、スマイルルーム以外の支援活動も行っておりますので、他にどのような支援をしているかも含めて説明をさせていただきます。ではよろしくお願いいたします。

春日市教育支援センターで作成された教育支援室スマイルルームの運営についてということで、スマイルルームが設置されているということで、説明をしたいと思います。設置目的は、生徒が様々な人間関係の中で、心を痛み、通常の学校生活、学級生活が難しい状況に至った場合に、家庭に引き込むのではなく、学校の中に一時的避難場所として設置しているスマイルルームを活用して、気力を充実させながら、学校復帰を目指すということが、設置目的です。その位置付けとしては2つあります。まず位置付けの1つは、不登校生徒については、家庭やマイスクールから再登校するための前段階の場です。それから、2番目としては、教室で学習したり、生活ができなくなった生徒については、不登校になる前の一時的避難場所ということになっています。

それでは、スマイルルームの現状と教育相談員の活動について説明をさせていただきます。まず春日野中学校のスマイルルームですけれども、後程説明をいたしますが、時間割りもあります。開設時間は8時55分から12時半とすようになっています。その間、スマイルルームで活動すれば、校長の面談等も必要になりますけれども、遅刻早退にはなりません。では、スマイルルームに入級したからといって、入級すれば、スマイル生全員を8時55分から12時半ということを守らせるかということ、そのようなことは一切しておりません。つまり、スマイルルームに入級しているからといって、生徒に対して一律には対

応してないということです。つまり、一人一人の現状、スマイルに入級した時期やスマイルへの入級理由、学年など、一人一人様々な要因を持っていますので、先ほどの位置付けの1、これは不登校の生徒をスマイルルームに連れてくる。それから、位置付けの2としては、教室に入れなくなった子をスマイルルームに連れてくるということで、一人一人違います。そのため、一人一人の生徒に合った対応を行っているというのが、春日野中のスマイルルームになります。

そのスマイルルームへの登校状況ですけれども、春日野中のスマイルルームは4月には4名からスタートしました。1月現在では、正式な11名と、ちょっとおいでよというようなことで連れてきている生徒10名。その他数名の21名がスマイルルームを利用しています。その状況としては、ほぼ毎日朝から登校している生徒が8名、母親に連れられてほぼ毎日登校する生徒1名、毎日遅刻して登校するが、決まった時間に登校する生徒が1名、毎日登校するが、時間が不規則登校の生徒が1名、また、毎日登校するが、家庭訪問を行い一緒に登校する生徒が1名、それから遅刻して登校するが、1時間程度の時間で帰る生徒、それからスマイルルームに入りましたけれども、急に欠席をし始めて、不登校になったんですけれども、原因がわかり対応を行うことで、12月からは登校し始めて、現在は不登校から復帰した生徒の14名と、それから、登校日が決まらず不規則登校してくる生徒とか、家庭訪問を繰り返しながら、何とか登校促しながら登校できる生徒、それから、逆に言うと、家庭訪問を繰り返しますけれども、登校が減った生徒と、このような状況です。ただし、最初述べました14名に関してはほぼ毎日登校しております。それから、そういうふうに登校時間とかいろいろ違う生徒の現状なんですけれども、教室へ配付物を取りに行ける生徒、また取りに行けない生徒、それから教室のオンラインを5教科、それから一部の教科を受ける生徒、全く教室に行けない生徒、登校して来てもグータッチして帰る生徒。それから午後から登校できる生徒、やっと登校し始めた生徒、週1日、もう通信制に行くなら、週1回は行かないかんから。その日だけは1日は来ようよというような感じで、何とか登校してくる生徒。それから、まずは登校することが大事なので、給食だけ食べにおいでとか、顔を見せるだけでもいいよというような感じで促している生徒、それから、1年のときはずっとスマイルルームを活用していましたけれども、今は、スマイルルームに朝来たらすぐに教室に上がって、そして授業を受けて、そして給食や昼休み等にスマイルルームを活用しながら、3年では教室復帰を目指している生徒、このようないろいろな生徒がいます。

今説明をしましたように、スマイル生は一人一人違う活動を行っています。位置付けの1、位置付けの2がありますように、その生徒の状況に合わせた対応を行っています。そのため、不登校担当者会とか、校長教頭を含めた不登校委員会から教育委員会等で、学年担任の先生方に、スマイル生を一律に対応しないで欲しいとお願いをしています。また、配付物が届かないとか、オンラインの授業に使用するプリントが届かないとか、オンラインがつながらない、そういう問題が起きないように、居場所は違うんですけれども、クラス、学年の一員として、スマイル生の対応を行って欲しいというお願いもしております。その効果があって、昨年度は登校できなかった生徒が、今年度は長期欠席にならなかったり、出席が増えたりしている生徒がいます。また、保護者からは、子どもの居場所が見つかって、ありがたいですと、そういう言葉も返ってきています。

スマイルルームは時間割がありますということを、先ほどお話しましたけれども、これがスマイルルームの時間割です。春日市のスマイルルームの運営の中で、時制については、様々な人間関係の中で、心が傷ついた生徒が一時的避難場所として学校生活を送る場所がスマイルルームです。そのため、一般生徒が登下校する時間帯にスマイル生が登校す

るということは、これは配慮不足です。それから子どもたちも登校できません。また、心が傷ついた生徒に対して、通常時制で6時間授業を受けさせるのは酷であります。通常の登校時間を30分程度ずらして、登校時間を設定する。これは不安感の除去になります。それから、スマイルルームの時間割を午前中のみに設定して、給食前に下校させる。これは達成感の感知というようなことで、それをもとに、春日野中学校では一部二部制を行っています。2校時3校時に授業を入れていただいています。1校時は朝の会、それから自学をするような時間にしています。4校時は給食が12時半から先に食べさせますので、少し早めに終わりますので、その時間は、自活の時間としています。ここで、子どもたちは、トランプとかオセロとか、そういうゲームをやりながら、学年とか入級した時期が違う、スマイル生同士のコミュニケーションづくりという時間としています。そのため、スマイル生の中では、やはり思いやりの心というのがものすごく生まれてきていると思います。これは生徒にとっては大事なことですし、喜ばしいことだと思っています。二部制の午後からですけれども、午後は授業が入っておりません。次年度は教室へと考えている生徒、それから人が多い午前は登校できない生徒、午後からでないはまだ登校できない生徒、まずは午後から登校しようねと約束した生徒、それから給食時間に登校して少しずつ馴染ませて活動時間を長くしていくような生徒、それから家庭の事情で早く帰れない生徒、それから教室に入れないが部活動だけは何とかやりたいという生徒もいますので、もう本当にここが、午後からが生徒の居場所として、自由にその生徒に応じた活動を行っている時間だというふうに考えていただければいいと思います。

それでは、2、3校時に授業が入っていますけれども、その様子を説明します。まず、数学なんですけれども、前方の生徒はオンライン授業を受けている生徒です。それから後方の生徒は数学の先生と、数字との関わり方など、雑談形式で話を行っている状況です。それから、これは英語の授業です。英語は、各自、特にスマイル生、不登校の子は不得意ですので、個別の指導を行ってもらっています。それから国語の様子です。学年に合わせたプリント等を使いながら、学年ごとの授業を行ってもらっています。それからこれは2校時の自学の様子なんですけれども、一人一人各教科のワークに取り組んだり、オンライン授業を受けたりしています。高校入試を控えた3年生は面接の質問事項に、答えをどのように答えたらいいとか、作文とかそういったものを自分のペースでやっているところです。それから、これは自活と書いてますけれども、4校時の自活の時間、それから昼休みです。カードのUNOゲームをみんなですしているところなんですけれども、学年を超えて、楽しくやっています。本当に微笑ましいです。スマイルルームのほうに入級したいというように、相談を受けた生徒とか保護者にはできるだけ、この4校時の自活の時間に来てもらっています。そしてこの和やかな雰囲気、そういったものを体験したり、見学してもらって、帰ってもらっています。このスマイルルームの雰囲気を体験した保護者は、この雰囲気であれば、子どもも安心して学校に行けそうねとか、ここは居場所になるねとか、そういう安心感を持たれて帰られています。

では、スマイルルームは時間割がありますけれども、それ以外の活動について説明をします。まず、火曜日の1校時、たまたま体育館が空いていました。そこで体育館で運動しようということで、バドミントン、バレーボール、バスケットなどを行うスマイルタイムをしています。それから、天気がいい日はちょっと外に出ようということで、春日公園、牛頸川遊歩道、春日神社などの中学校周辺の校外散策。それから、体を動かそうということで、月2回の教育支援センターマイスクールのスポーツ交流会に参加をしています。それから、これはスマイルルームとして、筑紫地区適応指導教室合同進路説明会へ参加をしています。それから、夏休み前半・後半のスマイルルームを開放しています。これは宿題

をやっているよとか、そういったことで開放しています。それから、今年初めて経験させてもらいましたけれど、長指導主幹による出前授業もさせてもらいました。それから、生け花体験、折り紙づくり。そしてサツマイモの苗植え付けから収穫まで、こういったこともスマイルルームでしています。特に自学それから自活時間を利用してのスマイルタイムとか校外散策、スポーツ交流会、これは積極的に行っています。スマイル生も、スマイルルームでひきこもっています。廊下を歩いたり教室に行ったりとかいうことができません。そのため、そのストレスの解消、体を動かす楽しさ、外の空気を吸いながら楽しく会話するなどの目的で実施しています。夏休みのスマイルルームの開放というのも、生徒保護者からは好評でした。それから、生け花体験はたまたま生徒の保護者が生け花の先生でしたので、保護者の好意でスマイルルームで生け花体験をしたような状況です。サツマイモは収穫したら全員に持って帰らせました。大変美味しかったみたいです。これはスポーツ交流会の様子になります。1月23日に行われた室内サッカーなんですけれども、説明とパスの練習風景なんですけれども、ちょっと試合の様子がありません。これは私、カメラマンなんですけれども、私も一緒にプレーに参加して走り回っておりましたので、これだけしかありません。

それから次です。これがスマイルルームとして参加している筑紫地区適応指導教室合同進路説明会の参加予定者表なんですけれども、スマイル生その他保護者を中心にスマイル生以外の生徒保護者にも参加を促しています。長期欠席者や兆候生徒とは、特に保護者なんですけれども、このままでは高校受験できるのかとか、それから進学できるのかという不安を常に持ってあります。そのため、1年生から学年を問わず、参加者を募っています。今年度は大野城市での開催でしたけれども、生徒が10名、保護者が8名参加しています。どのように行きましたかという、スマイル生と大野城駅まで一緒に歩いて行って、そこからコミュニティバスに乗って、乗車マナー、車内マナーとかそういうものを勉強しながら、現地で保護者と落ち合って、保護者それから生徒同士で進路の説明を聞いたということになります。そして、帰りは保護者と一緒に、それから生徒同士であれば大野城駅まで一緒に来て、そこから解散ということにしています。来年度が太宰府市です。また、どのように方法を考えて、たくさん生徒それから保護者を参加させたいとは思っています。ちなみに昨年度は春日市でした。春日市のときは、私は春日西中にいましたけれども、スマイルルームの生徒保護者を中心に45名ほど、この進路説明会に参加しました。

これが生け花の作ったものです。生け花は、職員室、校長室、それからスマイルルームの教室、廊下等に飾らせてもらっています。それから折り紙はちょうど50周年記念のところに置かせてもらったり、それから、職員室の入口の前とかに置かせてもらっています。あとはですね、長指導主幹の出前授業によって、韓国のプサンの日本人学校との交流をさせていただきました。そのお礼として、この折り紙それから手紙を送りました。大変向こうも喜んでいただきました。

それでは、教育相談員のスマイルルーム以外の活動というのが、どういうのがあるかを説明をさせていただきます。まず、先ほど話しましたようにスポーツ交流会の参加、それから筑紫地区適応指導教室合同進路説明会の参加があります。その次は3年生のスマイル生の受験支援をしています。作文を作ったり、それから面接の練習をしたりとか、そういったものが中心になりますけれども、クラスの生徒ができないようなことをスマイルルームでしています。それから、3年生は進路確定届が出る前に担任との3者面談後に、スマイル面談というところで行っています。それから1、2年生は夏休み冬休みの保護者面談をやっています。それから、連携になりますけれども、校内での保健主事、不登校担当、担任やSSW、スクールカウンセラーと連携を図っています。特に月3回の不登校担当者会、

それから月1回の不登校委員会、それからケース会議というふうになっています。それから、校外では教育支援センターマイスクールと連携を図っています。マイスクール生もいますので、配付物を届けたり、それからマイスクール生に受験支援をしたり、それから緊急性のある事案に対して、支援センターのスクールカウンセラーによってカウンセリングをお願いしたりとか、そういう連携をしています。最後は家庭訪問、家庭連絡。保護者との連携になります。この星印をつけているのが、一番大事なことはないかと思っています。

では、家庭訪問や家庭連絡などの連携はどのようなことを行っているかについて説明します。家庭訪問は授業がある2、3校時を中心に行っています。スマイル生は連絡がなく登校していない生徒、スマイル生以外の長期欠席者などは、本人の様子確認や近辺を一緒に歩いて外に出ようやというようなことで、スマイルルームとかマイスクールに1歩近づくようなことをしています。それから、登下校支援、これは一緒に家庭訪問に行って登校したり、それからスマイルルームから帰るときに一緒に下校したりというようなことをしています。それから、長期欠席者、不登校者にスマイルルームという居場所があるよということで、見学説明においてよとか、そういう登校を促したりすることもしています。それから、スマイル生ではあるが行き渋りをする生徒への登校を促し、それからクラスの配付物を不登校生徒に届けたりとか、それから保護者の困り感などを聞いたりとか、そういったことも行っています。家庭連絡では、スマイル生は遅刻欠席がない場合や、普段の登校時間に登校しない生徒への保護者への連絡。それから長期欠席者で関わりある生徒に対しては、本人の様子や保護者の困り感などがなくないか尋ねたりしています。

保護者と連携したことにより、昨年度から、スマイルルームに入ってから改善した生徒、それから、スマイル生以外でも改善した生徒がいます。まず、スマイル入級生は、昨年度長期欠席者3年のMさんが欠席1日です。それから2年のMさんが欠席17日、Kさん25日。多分、30日はもう超えないと思います。それから長期欠席から復帰した3年のKさん、12月からもう欠席していません。それから、居場所になっている生徒が、3年生2年生に6人ほどいます。保護者の方が居場所ができてよかったと喜んである生徒です。それから進路相談支援等で進路決定したのが3年生に2人います。これを作った後にあと3名進路が決まっています。それからスマイル生以外の生徒では、昨年度長期欠席者3年のMさんは欠席8日になっています。それから2年生のSさんは欠席1日です。それからスポーツ交流会などに参加するようになった2年生が1人います。それから進路相談支援等で、進路決定が決まったのが、3年生に3人ほどいます。こういうふうに、その保護者と連携したことによって、かなり改善をした生徒が見られるようになりました。家庭訪問は4月から1月末まで416回行っています。ただ、去年に比べると若干まだ少ないです。そして校内外、それから保護者との連携、それから先生方や保護者の意識が少しずつありますが、変わってきました。それで、去年と今年の不登校出現率を12月現在で比較しますと、令和4年度は5.4%でした。それが令和5年度は3.31%というふうに減少しています。これ12月なんですけれども、1月の3.31%は変わりありません。

最後に、来年度に向けての課題を少しお話をさせていただきます。まず、関わりが持てない生徒がいるということです。それから関わって欲しくないと言われる保護者もいます。そっとしておいてくださいという保護者もいます。それから、スマイルルームをまだ理解してもらえない保護者がいます。それから、先生方なんですけれども、スマイルルームに入級した生徒に対して、まだ個々の対応ができずに、スマイル生として一律に対応するところがまだ残っています。それから、生徒保護者への早めの対応、スマイルに早く入れましょうよとか、そういう話をしましょうよとか、家庭訪問に先生行ってもらえませ

か、とか、そういう早めの対応をしていくということが課題になるんじゃないかと思います。ただ、少しずつですけれども、スマイルルームに対して、それから教育相談員としての理解が深まってきていると思います。長指導主幹が言われるんですけれども、本来ならば、教室が生徒の居場所なんです。ただ、理由があって教室に入れない生徒が増えてきました。なので、生徒の居場所はクラスだけではない、特別支援学級、スマイルルーム、マイスクールとそれぞれ生徒に応じたところが居場所であるということで、その居場所に、学校、学年、担任としてそれぞれ対応していただきたいと。そういったことを、次年度、再度理解をしてもらい教職員一丸となって、春日野中の不登校生徒を1人でも減らしたいというような形でやっていきたいと思っています。これで終わります。

#### ○藤井部長

それでは続きまして、教育支援センターにおける支援事例についてでございます。教育支援センターの木村センター長の方に説明をお願いしております。よろしく願いいたします。

#### ○木村センター長

教育支援センター長の木村です。よろしく願いいたします。今日はこういう機会を与えていただきましてありがとうございます。大変うれしく思っています。なかなか日頃、支援センター、マイスクールということを皆さんにお話する機会がないので、目一杯と思ってるんですが時間があるんで。それでは、お話をさせていただきたいと思います。なお、せっかくですから写真を使って説明をしたいということで、いろいろ写真が出てきますが、やはり守秘義務の問題がありますので、どうしても遠目の写真が多くなっていますが、御了解いただければと思っています。

まず最初にどうしてもですね、教育支援センターの歩みを皆さんに知っていただければということで1枚ものを用意しています。平成13年に、春日市適応指導教室が設置されました。思いも、不登校児童生徒の学校復帰を促すというマイスクールの役割ということで設置されたんですが、その後、平成15年に教育支援センター整備指針というのが出ましたので、春日市では、もう早速17年には、教育支援センターということで名前を変えて、取り組み始めたところですが、ところが、まだ学校復帰を目指すマイスクールの役割が多かったんですが、23年にもう1回、役割を見直そうということで、先ほども出てきました。1つは、不登校児童生徒支援の中核機能を果たすことという、この大きな役割がつけ加わったことで、令和5年度は、そこに図示しているような形で運営を行っています。現在、センターに3名、スクールカウンセラーが1名、それから専門スタッフと呼んでますが、各小中学校に配置してまず教育相談員12名。それからスクールソーシャルワーカー3名の19名で、教育支援センターの業務をやっているところです。

次に、どうしても不登校のことについて理解していただきたいという基本的なことを4項目ほど説明をさせていただければと思っています。これは不登校を解消させるためには、不登校段階の3つのステップに応じた予防と対応をすることが重要だと言われていきます。まずは、基本中の基本ですが、不登校を生まない環境の基盤として、未然防止、魅力ある学校づくり。次に、どの子どもにも不登校という問題は起こりうるという認識を持つということです。そういうことですから、休み始めの測定を、それから早期発見、早期対応を行うことが非常に不登校の解消に向けては大事なことになってきます。さらに休みがどうしても継続してしまっていて、30日以上になったときに、取り扱い上、不登校という形でやっていくわけですが、この段階に至った子どもたちについては、自立支援に向けて事後

の対応やケアを行うことが非常に大事になりますので、適応指導教室、マイスクール等の専門機関が関わって、早い動きで早い連携をやっていくということで、非常に重要になっているところなんです。次に2つ目ですね、不登校からの回復過程。不登校というのがどういう形で起こっていったのかというのを表した図です。左側から、不登校状態はストレス要因によるエネルギーの低下によって引き起こされるということで言われています。実際の状況は、茶色の実線が、表面的に現れている形であって、元気そうに見えるというようなことが最初の段階はあるということで、しかし実際のエネルギーは水色の点線で現れているんですが、表面上よりも早くエネルギーはやはり低下していった。逆に回復するときには、早めに少しずつエネルギーが溜まっている状態なんで、早めに、回復していったというのは、これでおわかりになると思います。こういった状況を踏まえてですね、本人の状態を正確に把握するというのが1つ。2つ目が、的確な対応をする。正確な把握、的確な対応するということが非常に大事になってくるということです。実際、この不登校の茶色の線は低下した状態から横にずっと停滞して回復して、この期間は、一人一人の子どもによって違います。長い子どもになるとやはり2年3年、4年5年とかかる場合があるということです。それから最初の低下する時点は、まだ早めに対応すれば何とかということで、先ほどお話が出てきました学校のスマイルルームとか保健室とか別室で個別の対応をすれば、不登校に至らないんじゃないかなということを考えています。逆に、回復状況にあったときには、早めに、安全安心な環境を提供してやることと理解してくれる人の存在を本人に感じさせることで、回復のカーブが急上昇していくというようなことが出ています。このあたりが、マイスクールやその他の専門機関の出番じゃないかなと、支援のスタートはここから始まるというふうに考えているところです。3つ目は、不登校に関してどうしても出てくるのが、多様な要因に起因する自尊感情の低下ということです。自尊感情については、棒グラフを御覧いただければわかるように、すでに小学校1年生の時期から低下が始まっているということです。一番低くなるのが中1ギャップと言われてる中1から中2。中3で若干上がるのは、やはり進路の問題がありますので、本人の気持ちに少し気力が充実していき始めたことで、少し復活している。ただ、高校生になると同じような状況が続いています。多感な思春期のこの時期が要注意の時期だと言われているのはこういった要因があると思っています。また、今説明しました自尊感情には主に3つの因子からなっています。最も低下するのは、自己評価・自己受容の因子であるということが研究で明らかになっています。右側の折れ線グラフを見ていただければ一番、水色の折れ線グラフが下がっていきつつありますが、3つの中でこの因子が一番下がっていくことから、この要因を研究が進める中で日本の子どもたちは、どうしても小さいときから、周りの評価を気にしすぎることが影響するということが考えられるんじゃないかなというふうなことを言われています。ですから、課題解決のためには、子どもが認められて自信を持って育つ、そういった発想の方が自信が持続しやすい。つまり、自己有用感の育成を図っていくということが大事だと言われているところです。4つ目は、不登校支援のための重要な視点は何かという話なんですけど、不登校の児童生徒の多様な要因に起因する自尊感情の低下を説明しましたがけれども、不登校のメカニズムの面から支援のための重要な視点を考えた図です。もともと持っている要因に、学校環境の悪化によるストレスが重なって、さらに本人のストレスに対処する力、辛さを乗り越えていく力が不足していた。それから周りをサポートするソーシャルサポート体制が不足していた。こういったものが加わり、不登校状態に陥ってしまうということが考えられています。そのために、学校期にはストレスに対処する力、辛さを乗り越えていく力を育成することが大事な使命だよと言われています。合わせて、本人をサポートする周囲の力も大きくしていくこと

が、大事だろうと考えているところです。下の左側には、社会性と耐性を培っていくことなんですが、社会性については、やはり様々な体験活動を通して人と関わっていく力をつける。いろんな体験活動を本人たちが味わっていくとそういったものが加わるんじゃないか、あわせて耐性というのは、1つは努力する力があり、もう1つは我慢する力というのがあります。これについては、やはり、スモールステップの、段階を踏みながら、絶対評価で子どもたちの評価を返していく。相対評価ではなく絶対評価。小さなことでもできたよという評価を子どもたちに与えていくということが大事ですし、そうやって我慢しながらやっていくということがやはりあるわけですね。子どもたちも、将来を考えたときにやはり今これを我慢してやらないといけないんじゃないか。そういった我慢しているところを、それでいいんだよ。その努力してる過程を評価し続けるということが非常に大事になってくると。結果だけじゃなくて途中の評価。これが非常に大事になっていくんじゃないかなということをおっしゃっています。こういった視点を不登校の支援に生かしていくことが、学校関係者、もちろん私たちも、大切なことだと認識しているところです。

それでは、これからマイスクールについてお話をさせていただきます。今まで出てきましたが、マイスクールとスマイルルームとどこが決定的に違うかとお尋ねしたらおわかりになりますか。何が子どもたちにとって一番違うのか。実は、学校内、学校外がありました。今の仕組みでは、スマイルルームに活動したら出席です。例えば、マイスクールは指導要録上出席取り扱いの出席です。ただ、このマイスクールあたりで活動してる日数を出席取り扱いするよということで、春日市の市教委も取り組んでいただいているので、やはりそこは、学校の壁が子どもたちにとってどんなに大きいものなのかというのが理解していただけるんじゃないかなと。出席なのか出席取り扱いなのか、大人が考えることかもしれませんが、メンタル面で考えたとき、子どもたちはやはり1歩足を学校に組み入れるというのは相当の勇気がいるということです。同じように、マイスクールでもやはり違った集団で生活するわけですから、非常に難しい。だけど、マイスクールに1歩足を踏み入れたときに、回復へのステップを踏み出したんじゃないかなというようなことを捉えています。マイスクールでは、まず先ほど出ました、回復期にある子どもたちを対象に入級して支援をしていきたい。それは立ち直る時期という形でいっぱい左に書いておりましたが、このときに大事なのは、そうは言っても自分の意思で自ら立ち直ろうとする気持ちを持てるかどうか。それはその後の支援に非常に関わってきます。周りから親から先生から言われたから、マイスクールに入級するんじゃない、自分が何とかしたいなあって、どっか行くところがないかなということで動き始めた。これが非常に大事になってくると思っています。その後入級して様々な活動や支援を受ける中で、自立する力がついてきたり、集団に適応する能力を獲得したり、そういうことでその結果が目標とする学校復帰、もしくは社会的自立を促すことに繋がっていくというふうに考えています。また、支援者としては、回復の過程をとおして、前に進もうとしている本人の歩みを待てること、実は、この間、保護者会には、私は待つ、そして次を待つことができるかと。動き始めたらやはり嬉しいじゃないですか。もう本当に嬉しい。先生たちもそうです。だけどすぐ次を要求しがちになるんですね。そうじゃなくて、ものすごい気持ちで前に進み始めた。だからこそ、次を待ってやるというのが非常に大事じゃないかなと。この間の保護者会でもそれを話をさせていただきました。また、スモールステップの活動の中でチャレンジしようとする気持ちを評価しなさいと先ほど言いましたが、さらには、子どもたちに必要な有効な活動をさせるためにも、この子どもたちのアセスメント、見立てをきちんと正確にやっていくということが大事だということで考えているいろんな実践をしているところです。それについて、次、説明をさせていただきます。

アセスメントが重要だということで、マイスクールでは、入居後に必ずやること。TEGとか、自尊感情測定尺度とか、それから学校・保護者との情報の共有、それから必ずカウンセリング、マイスクールのカウンセラーに、本人も保護者も両方カウンセリングをしていただくようにしています。最初に保護者の方からカウンセリングをしていただき、次に本人という形で取っています。それからもちろん学習的な問題もありますので、習熟度テストつまりチェックをやるようにしています。右側は、入級した後も効果的な支援を行うためにということで、そこに挙げてますような、関係機関と連携しながら、資料を収集して、入居後の支援に生かしているところです。それではこれから具体的な支援について説明をさせていただきます。マイスクールは、1つは、学校復帰や社会的自立に必要な集団生活に適応する力を育てる場であるということ。2つ目が、物理的（空間）、心理的（人）に守られている場であるということ。3つ目が子どもたちが元気を取り戻し、何事にも挑戦しようとする意欲を高める場でないといけないということ。この3つの場を兼ね備えて、その中で1つ、自立する力、2つ、学ぶ力、3つ、人と関わる力、この3つの力を、ぜひマイスクールで育てていきたいと考えているところです。具体的には、その3つ。1つは自立性、意思力や体力の育成を図る活動。1つは学ぶ力、考え表現する力を育成する活動、社会性、認め適応する力の育成を図る活動。様々な活動を通して、この3つの力を育てるように考えています。

それではこれから具体的にマイスクールの運営について説明をします。基本的には、柔軟なマイスクールの運営。1日の時制についても、柔軟な考えのもとに編成をしています。左側が10時から始まって、15時で終わるようにしてるんですが、朝は朝の会で始まり、1時間の前半は、マイスクールの特色あるサプラタイムやコラボ学習、後半は基礎学力の定着のためのモジュール学習というプリントを使った学習ですけど、これを行います。2時間目は、基本的に自学自習です。職員は教員ではありません。授業はできませんので、あくまでも支援です。学習支援ということで、本人一人一人が自分にまず課題を解決したい勉強をしていこうと。それを自分でやると、それにサポートするということがです。午後からは、基本的には1週間体験活動を組んでいます。曜日ごとにそこにいろんな活動、運営を書いてありますが、いろんなテーマに沿って様々な活動をやっているところです。1日の時制は、やはり回復過程を考えて4時間程度ということで考えてます。それから朝の通級は、小中学校の登下校時間とか合わないようにはずらすという配慮もやはり必要かなということで、もちろん春日市内に1つですから範囲が広いということもありますが、やはりそういったことも考えて時制を組んでいるところです。それから柔軟なということで、コース制導入を採用しています。全日制、一部制、二部制、在宅制。起立性調節障害などでいろんな形で、朝起きれない、遅刻をするといった失敗体験が多い子どもたちがいます。そういった部分は少しでも自分がここなら来れるよっていうところからまず来ようということから始めてですね、そのことで、成功体験を味わうことで、さらに、全日制あたりに繋がっていくんじゃないかなということで、こういった構成を作っています。実際、一部の午前中とか、二部の昼からということで入った子どもも、最後には全日制になっていっています。ですから、いろんな形で成功体験というのは、大きいものだなというようなことを思っているところです。ここに在宅制と出てきましたので、在宅制のシステムをちょっとそこに書いております。在宅制は学習プリントを、メール、FAX、持参等で、子どもたちに渡してそれをまた答案を受け取る。それを、今は小中学校で添削しています。それでまた返すと、この1サイクルを、出席取扱1日ということで考えてやっているシステムです。

具体的に活動を説明します。これは先ほど言いました朝のウォーミングアップで活用しているサブリタイムです。これを行うことで、そのあとの教科や体験学習に取り組みやすいようなことを考えてやっています。これはコラボ学習、異学年集団によるコラボの学習です。数学の授業ができますが、ペープサートを利用して、問題を解くのですが、異学年で一緒にやりますと、いろんな学年がいろんな考え方をします。そのことで、いろんな子どもたちがそれなりの理解力でやっぱり考えていけるようになるというのが非常に大きなことだと思っています。これは、やはりそうは言いますが、うちだけでは足りないところがありますので、1つは、中学校にお願いして中学校の先生方に出前授業としてきていただいて授業をやっています。上は数学、横は音楽なんです。それから合わせてお願いをしてALTのモーゼス先生に月1回来ていただいて、楽しい英会話教育をいただいています。これも意欲的にですね、やはり面白いので、楽しく活動しています。それから、ICTを活用した活動も今後取り組んでいきます。代表的なものを3つ挙げてます。1つは調理実習で、YouTubeを使いました。これは、イメージトレーニングと、実はそのことで話し合う機会が増えるわけですねいろいろ。そういったコミュニケーション、これをつける。下はですね、タブレット端末を活用して、登校・通級意識の醸成、うちからは欠席したときに予定あたりを送っていくことで、今度行こうかなあというようなことを電話だけではなく、こういう形で、意欲を高めることができるのかなと。それから、各学校とも授業を見ることができると、それをやりながら気持ちを高めていく。右側は、春日野中学校でも出ました、プサンの日本人学校と交流したオンラインミーティング。これは心配してましたけど、僕たち大人が心配するより子どもたちはすごいですね。韓国の話の盛り上がりました。やはりこういうものをやはり、作っていくというのが大事な、機会をですね。あと、それ以外に体験活動ということでプログラムの改善を図っているところです。下の段に、コロナ禍でありましたので、特に身近なところに行こうということで取り組んでいるところです。具体的に、これは社会性を育てるということで、職場体験、それから緑のカーテンプロジェクトで春日市からいただいた宇宙の朝顔の種、それから夕顔が咲くから帰ろうという夕顔運動でいただいた種が30年続いているんです。これを使って、それでお話ができますのでそういうこと。それから下の段は、近くのことです。那珂川の裂田溝を見学に行ったところです。一番言いたかったのはその上のあんどん祭り、毎年、あんどんを作って展示をさせていただいています。なかなか好評でこれ見てください、これ透明ですけど、きめ細かいものすごいですね。終わった後は、春日市の夜の図書館で1ヶ月ほど展示もさせていただいています。それから、今後の体験活動ということで、音楽を特に感性を育む音楽活動ということで、様々な取り組み、それからスクーリング、それからニコニコデイキャンプ、それからイーグルスに来ていただいて、スポーツ講習、それから遊び名人の方に来ていただいて、この前やっただけの皿まわしです。子どもが、ものすごく上手だったので、スカウトされました。本当にこれはお年寄りの方と楽しい時間を過ごすことでいろんな気持ちが膨らんでいくんじゃないかなと思っています。それから、今一番これに凝っています。コミュニティバス、きっかけは3つの市のコミュニティバスを繋いだら、春日市から竈門神社まで行けるじゃないかということで行きました。これをやよい号でももう1回見直そうということで、最近やよい号に絞って、今年は4路線伸びました。8路線もあるのは予想しないじゃないですか。何気なく見てるんですけど、すごいことなんだよというのが、やはり乗ったらわかるわけですね。それから、地域の方に声をかけていただく。もう非常に嬉しいですね、子どもたちは。そういったことがあるので、春日市のコミュニティバスを続けていきたいなと思っています。あと、ソーシャルサポート力の向上ということで保護者を対象に、スクールだよりを出した

り、保護者会を開いて進路に関する懇談会を独自で開いたりやっています。やはり、保護者が一番悩んでいます。一番身近な保護者、特に母親を本人たちにとって理解してくれる一番の人だよって感じさせるのが大事ななと思ってますので、親、保護者を対象にしたいろんな取り組みをさせていただいてるところです。これが先ほど出ました筑紫地区適応指導教室連絡協議会の合同進路説明会です。これは27年度に春日市で始めました。持ち回りで、昨年度春日市で2回目をさせていただきました。今年は大野城市だったんですが去年は383名ですけど今年は400名を超えました。400名超えたんですけど、4分の1は春日市です。だからいかに春日市の保護者の方、子どもたちがこういった機会を待っていたかというのは、ずっと感じているところです。これは感謝してます、春日市で始められたということ。

最後に、入級生がどんなふうに変容していったかということをお話させていただきます。事例が2つほどありますが、出席数、コーキングスキル、ソーシャルサポート、自尊感情の視点で説明をします。上の事例1は、今年卒業した男子です。下の事例は、現在3年生の女子です。出席日数は、2年の欠席日数、3年の欠席日数はそのままの出席簿上の欠席日数です。ですから、上の男子の場合は3年の欠席日数が161日なんですけど、マイスクールに通級する数が129日あるから、実際指導要録上は32日の欠席でとどまってるということです。下の女の子は実は2年生の時は201日、これはほとんど欠席です。来たのは1日だけ。だけど、3年生にきっかけがあって入級して、今現在、141日なんですけど、実際はマイスクール108日通級できたんで、欠席日数は指導要録上は33日あったと。それから、コーキングスキルとソーシャルワーカーの件に関しては、上の事例1の男子は、3年の4月に入級したときに、自分1人だったんで3年生が。リーダー的な役割をするようになってそのまま力がついていった。それからソーシャルサポートについては、9月です。お父さんといろいろ悩んでいたことを、しっかり話ができたと。これがきっかけになって、腑に落ちたってわけではないけど自分なりに方向性が見つかったのかなと思います。その後、10月以降、1日しか休んでいません。で、下の女の子はもともと201日の欠席ですから、4月に入居したこと自体がもうきっかけ。それから7月に、先ほどの合同進路説明会に親子で出席したこと、それで保護者から励ましの言葉をいただいた。それから先の欠席日数が減って行って、進路についても自分で考えてやれるようになったということです。右側に自尊感情のグラフをつけています。事例1は1年生のときから3年生にかけて大きくなっているのがわかると思います。3年生の女子についても、短時間で大きくなることはないんですけど、これだけバランスよくなっています。この自尊感情は3観点でバランスよく出ているのかというのが1つ。2つ目はそのバランスよく出たものが大きくなるというのがいいということ、幸いにも2人とも高校に行ってます。それから2人目の女の子はこの間合格通知をいただきました。実はですね、航空機械エンジニアリング航空課に。飛行機が好きだと。大変なことなんですけど、これに頑張ってる。201日休んでた子がですね。

感謝の言葉をやはりいろいろいただきますが、今日見て欲しかったのは、下の左側です。教育相談員は毎月いろいろ頑張ってますが、この赤字で書いたところですね。今は娘を理解してくれてる先生方、先生がたくさんいてくださる。ここだと思っています。教育相談員に個別個別には感謝の気持ちをいただくんですが、そのことが、実は学校全部にも娘を理解してくれてる先生がたくさんいるんだということを保護者にわかったということは、ものすごい安心感を覚える。それこそ教育相談員の役割があったんじゃないかなんと思ってるということです。

最後になりました。すいません長くなりました。これからの適切な支援、今後の課題ということで、これはもうセンター的なことですが、不登校兆候要因の多様化と出現の低年齢化の対応、たくさん考えていかないかん。不登校の原因というのは要因と誘因があって、深層原因が小さいときからの子育て、親の心因性、家庭状況、子どもの心因性・発達課題等からあると言われてます。要するに、幼児期、誘因が表面のきっかけですよ。これが学校で起こしてしまう子どもに対する、暴力的な言葉とかですね、マルトリートメントで言われていますが、子どもに対する子どもがショックを受けるような対応、こういうきっかけがある。それと共通した弱さがあるということです。これまで小中9年間でという繋がりをということで言っていましたけど、実はそういったことを考えると、幼児期、15年間の繋がりを重視した対応を考えないかんじゃないかなと。ただ、全部幼児期に責任を負わせるとかそういう考えではありません。それぞれの時期に、それぞれが身につけさせないといけない課題をですね、しっかり付けさせるというのがまず大事だと。子どもの0歳児には7割の脳ができ上がっていつてますが、本人が意識しなくても無意識的に感じる育ちをさせないといけない。それが積み重なって、小学校中学校の学校期に集団的な力をつけていくわけです。ですからそういう考えで、それぞれがそれぞれの役割を果たすこと、そして、それぞれが得た情報や支援内容を共有しながら積み上げていくことで中3進路決定、社会的自立に繋がるんじゃないかなと今考えてます。この②、③というのはそれで、最近のマイスクールの課題で考えないといけない課題を書いているわけですが、今述べました最初のことをやるのが、ここにつながっていくんじゃないかなと思っています。長くなりましたが、これはいつも最後に使う、みんなで作ろうチーム学校で、組織的・安全安心な教育環境づくり。ここは学校だけじゃなくて、子どもたちに関わるみんなで作ろう。安全安心な教育環境づくりだというふうに最近考えているところです。長くなりました、ありがとうございました。

#### ○藤井部長

木村センター長ありがとうございました。萬教育相談員、木村センター長におかれましては、現場での取り組みの状況であるとか、子どもたちの変化の在り様、そういったものを、懇切丁寧にわかりやすく説明いただきました。今回の業務もお忙しいところ、事例発表の準備をしていただきまして本当にありがとうございました。それでは続きまして、意見交換に移らせていただきます。意見の意見交換のテーマは、不登校児童生徒への効果的な支援のために、とさせていただきます。ただいまの説明や本市の不登校対策、関係する施策などにつきまして、教育委員の皆様から御意見、御質問がございましたら、挙手をお願いいたします。また発言される際には、お手元のマイクのスイッチをオンにしてください、発言後オフにしてください。それでは、教育委員の皆様、御意見ございましたらお願いいたします。

#### ○安本委員

教育委員をやっております安本と申します。今、スマイルルームやマイスクール、教育支援センターの現状のお話を伺いまして、本当に頭が下がる思いで、春日市民の1名としても、お礼を申し上げたいと感じています。つまり、1人2人救ったからっていうのがあるかもしれないけど、やはり救われてですね、おそらく進路が決まった子達がいて、夢が生まれて、将来こうしたいっていうのが出てきてると思うんですね。そういう夢っていうのが、小学校低学年とか、中学校入ったときにあったのかなあその子たちってのはちょ

っと考えながら、ひょっとしたらスマイルルームとか支援センターで夢が出て、こうなりたい。さっきの工学部の航空ですか。僕はすごいと思います。

今後の展望ということで、目的にも書かれております。今、資料1の方で課長補佐のお話がありまして、おそらく中1ギャップっていうのが先ほど出ましたけど、この小1ギャップになってきてるのかなと。小1ギャップっていうと、幼稚園とか保育園の話になってくるわけで。私、教育委員ですので、小学校中学校の状況は非常によく資料とかをたくさんいただいて、不登校対策とかの現状報告とかも毎年もらってます。小学校1年生になったときに、その幼稚園、保育園からの兆候があるような児童が情報としてわかれば、教育委員会も動きやすいのかなと。そこで出てくるのは、今年度新設された、こども支援部になってくるのかなと。こども支援部の情報収集能力と、教育委員会の情報交換がうまくできていれば、小1ギャップっていうのも活動ができるんじゃないかなと。中1ギャップを減らしたような小1ギャップを減らすようなことをやれば、小学校に上がったときに不登校になる子どもが減るとか、小学校の先生とか、教育支援員の方は、小学校で出てきた不登校を対策されてると。いわゆる少ない人数でやられてるので、人員が増えればいいんですけど、こども支援部の方と教育委員会の方と一緒に活動ができるような、あとは福祉も入ってくるかもしれませんが、そういう活動に今後の展望としてやっていただければいいのかな。そんな感じでお話を聞かせていただきました。

#### ○藤井部長

安本委員、ありがとうございます。今、安本委員の方からですね、小1ギャップの対策というような形で、就学前の子どもたち、この子どもたちの状況をどのような形で、小学校に上がる段階で、いわゆる教育委員会、学校の方にそういった情報がうまく連携が図られてるのかというところで、御意見いただいたかと思えます。その件について、それぞれの担当部署の方で何か回答がございましたらお願いいたします。

#### ○生田部長

こども支援部の部長をしております生田といいます。よろしくお願いたします。ただいま小1ギャップの対応で、未就学児への対応のことについてということでお話があったと思いますが、今現在、幼保小の連携、幼稚園、保育園、小学校の連携を、こども支援部と、教育部の学校教育課の方と進めているところではございます。その詳細について、中心になっていただいているのが学校教育課になりますので、ご説明いただけるかと思えます。

#### ○八尋指導主事

学校教育課指導主事の八尋です。どうぞよろしくお願いいたします。小中連携は小学校中学校で行ってきていたので、今年度になって私も指導主事でこちらに配属になって、幼保小の連携ということで今こども支援部と一緒に、毎月1回、幼保小連携会議をさせていただいているのが、まず1つ。それと、幼保小連携ということで小学校と幼稚園、今までずっと連携してきていたのを年2回、年度始めと年度終わりに行っていたのを、夏休みにもやって、まずは担当者同士で顔合わせをして、顔が見える関係になって、子どもたちを見守っていかうということで、それに参加していくっていうことが1つ。それと、来年度からは小学校に幼保小担当ということで、窓口を明確にしてですね、幼保小と一緒にやっていかうという動きをやっていきます。今年度、夏休みに顔合わせをしたことによってですね、今、来年度入ってくる1年生がどこの幼稚園保育園から来るのかというのは、各小学校で

わかっているのですが、小学校によっては実際にその顔の見える関係になったので、幼稚園保育園に連絡をして、実際に見に行かせてもらっていいですかということで。今まではなかなか動きが鈍いところは正直あったんですけども、そういう動きも出てきているので、今後も継続していきたいなということで今連携させていただいています。なので、これからますます連携していくことで、子どもたちの育ちをつないでいくということで小学校で切れないように連携していきたいなと思っていますところ。以上です。

○藤井部長

はい。ありがとうございます。教育委員さんの方から、御意見ございますでしょうか。

○染原委員

教育委員の染原と申します。平成25年から3年間、教育支援センターで扇教育長さんがセンター長の時に勉強させていただきました。その頃から脈々と続いている子どもたちへの支援がますます充実してきているようで、とてもうれしく木村センター長さんの話を拝聴させていただきました。その当時から、私はわからないまま一生懸命、通常クラスでできないお子さんたちについての検査などをしながら、その認知力がどう不登校に関わるのかという方面からも見せていただいて、それは今も続けていただいているようでうれしく思います。それなのに、やはり、不登校がなかなか減らないという現状にとっても胸が痛んで、どこがどうなってるんだろうっていうふうに思います。先生方のいろいろお話を聞いていると、元はやはり、子どもに対する親とか大人、周りの声かけとか、態度などでちっちゃいときから非常に自分に自信がなくなってしまうっていうような状況もあるんだということを感じました。そこら辺を今、幼保小で連携していかなきゃいけないという方向に春日市がきているっていうのがとてもうれしいなと思います。これで少し解決していったらいいなと思っています。私は、サスペンスのドラマが好きで、見てると大きくなって、不都合、不具合を起こす方達は、小さいときに掛けられた言葉、その状況が沸々と燃え上がってくるわけですね。中学を過ぎて、社会に出たとき、対応ができなくなっているという状況がすっごく浮き彫りにされてくるので、今春日市がやろうとしていることは、非常に価値のあることだと私は誇らしく思います。それで、子どもたちをただ褒めるだけではなく、どこがいいとか悪いとかだけでもなく、その子の考えを、ずっとサポートしていくような形をとるとするのは、センター長さんや萬先生の話にもありましたけど、その子たち一人一人違うんだということから出発していくことだと思うんですね。中1ギャップになると、もっと根が深くなるんですけど、学力面とかに強く左右されてきます。それで高校も抱き込んでっていうことになって、非常に先生方の仕事が、幅広くなって、大変だと思うんですが、とても良い方向を目指していると思います。私は本当にこれがうまくいけば、春日市の子どもたちが「春日市で育ってよかったね。」っていう子どもたちが増えて、大人になっていくんではないかなと思うんですね。私は、そういう分析をきちっとしていくっていうことが、とても大事だと思います。今の教育長はセンター長だった頃からずっと、表面だけではなくその根っこにあるところを探っていくという、そういう意識を持ってあります。できたできなかっただけではなく、何が子どもの心をそうさせたんだろうっていうようにスクールカウンセラーの先生とかとうまく連携されて、根っこのところをやはり深掘りしていくっていうことを、ぜひ続けていただきたいなと私は要望したいです。表面の数がどうのこうのっていうのよりもそこら辺が大事じゃないかなって思うんですけど。感想です。質問ではございません。以上です。

○藤井部長

はい。どうもありがとうございました。染原委員の方からは子ども時代の体験、経験が大人になって、いろいろな大きな影響があるというふうな感じの中で、今回、春日市の教育の取り組みが、子どもたちを褒めるだけでなく様々な視点からもサポートしていているというところ、またそれに基づいて、様々な結果分析をしているもの、何が根っこになってこのような原因が生じているのか要因をしっかりと究明していているというところ、今後も引き続き続けて欲しいというご意見だったと思いますので、こちらでしっかり受けとめさせていただいて、今後も続けるような形で対応させていただければと思います。

○宮崎委員

教育委員の宮崎泰三郎です。萬先生、そして木村センター長の貴重なお話いただきありがとうございました。

木村センター長の最後の方に、不登校の原因に親の品性とか、家庭状況っていうのがございました。そして小中9年間から幼小中15年間の繋がりを重視した対応へというのがあるんですが、これ非常に私も重要とあって。実は私が思ってるのは、15年プラスその前の10ヶ月、産前産後と言われる部分、ここにですね、夫婦からあんたたち親になるとよ、というタッチが非常に重要だと思うんですけども、親の安定というのが、この不登校を減らすというか、そこが減っていく重要な要因になるんじゃないかなというふうに考えています。この産前産後の部分というのは、何か市として対応されてあるのか、お聞かせいただきたいと思います。

○藤井部長

それでは、宮崎委員の方から産前産後、いわゆる、これから親になっていくんだよっていう、そういった自覚の部分も含めて、何か市の支援の取り組みがあるのかということでのお尋ねでございます。担当所管の方からお願いいたします。

○武末課長

子育て支援課の武末と申します。よろしくお願いたします。産前産後の取り組みにつきましては、令和4年度末から始まりました出産子育て応援事業に今力を入れてやらせていただいております。まず、一体的に継続して相談支援を行っていくというところで、なかなかやはり核家族化などが進んでいる状況の中で、子育て環境というものに、親自身が慣れていないというところもありますので、うちの職員であります助産師、保健師が、一貫して相談を受けさせていただきながら、支援をし続けていくことをやっております。教室につきましては、マタニティークラスでありますとかパパママ教室を続けさせていただきながら、親になるというところの心構えでありますとか、準備をどういうふうにする必要があるのかということ。また、父親の育児参加につきましても、そういう心構えをみんなで共有しながら、最近では育児休暇を父親もとれるというところがございますので、そういうところも含めて、家族で赤ちゃんを迎える心構えの重要性を、職員一同で頑張っているところがございます。

○足達委員

教育委員の足達です。本日は各団体の皆様の御努力を伺うことができて、本当にありがとうございました。いつもそういう活動こそが、春日市の底力を上げるのに役立っているのではないかと、感謝申し上げます。ただ、中で1つ他市町村のコマーシャルがよく

聞かれて、耳にするところなんですけど、まず0歳児におむつを配布するとかいうような。そういうところに目がいってしまって、春日市はどうなんだろうと思うわけですが、今の産前産後の親への取り組みの対応を聞きまして、少し安心するところではございますが、地域の活動をしておりますので、そのあたりが地域には全然見えてないわけですね。高齢者は、福祉の方で見守り活動などをしておりまして、心配な人はいませんかという取り組みをしてるんですが、0歳児に関しては、どこにどなたがいるのか。どういう支援を、声掛けをしていいのかは、今のところ全く見えてません。せめて、お祝い品などがありましたら届けてみたいと思うんですが、最近、個人情報ということで全く見えてない。高齢者に比べて0歳児に関しては、わからないな、教育という面から言えば0歳児こそ大事にしたいな、また、家庭の経済状況が良くないとかいうのであれば、何か支援するところが、地域にもできるのではないかなと思ったりもしますので、何かいい対策があれば、地域の方へもお知らせいただきたいなと思います。

#### ○藤井部長

足達委員の方からは、0歳児への支援、高齢者の対応に比べて、地域にはなかなか0歳児の状況が把握できないというところも含めて、こういった地域の0歳児への支援といった形でできるのかというところでのご質問だったと思います。

#### ○武末課長

地域において、子育てサロンというのは各公民館でしていただいているところでございます。社会福祉協議会と連携してやっていたり、地域がやっていたりする事業というふうに認識をしております。身近なところで、親子で遊んだりとか、地域の方々と交流する場所というところで、地域それぞれの特色を持った活動というのをしていただいております。地域にチラシを配るなどして、参加者を募って、そこに毎回、ちっちゃい赤ちゃんを連れて行かれているというふうな状況は、聞き及んでるところでございます。それ以外にも、御存じかと思いますが、子ども食堂でありますとか、そういった地域それぞれの特色を生かした活動というのをやっておりますので、そちらを市としてもいろいろな支援をさせていただきながら、一緒に取り組みをさせていただいているところでございます。

#### ○生田部長

追加でよろしいでしょうか。今、武末課長が申しましたけれども、0歳児につきましては先ほどの出産子育て応援事業で丁寧に行っているところもありますし、出産後2、3ヶ月で、全員に様子を伺いに赤ちゃん訪問とかもやっております。ただ、国の方も、もう子どもは地域で育てていくんだよ、社会全体で育てていくんだよという方針も出ており、市も出しておりますので、その点からも、地域の方やボランティアの方々のお力を今後いただくこともたくさんあると思います。また、春日市としての施策も変わっていくところも考えられますので、その時にはどうぞお知らせいたしますので、どうぞ御協力いただければと思っておるところではございます。

#### ○足達委員

どうもありがとうございました。ただ、地域での子育ての広場がありますが、保育園に0歳児から行かせておられる親が、把握しておられるならここ0歳児の何%ぐらいが保育園に行ってるのか知りたいところではありますね。要するに子育てサロンに来れるのは、

保育園にも行っていない、親が2歳3歳まで自宅で見ているっていう、お子様が対象なので、0歳3ヶ月以降、保育園に行っているお子様の割合がわかれば、ちょっと活動しやすいんですよ。地域によっては、ほとんど昼間、小さい子を見ないっていうところがございますので、もしわかれば教えていただきたいと思います。

#### ○藤井部長

足達委員、もしよろしければ、また後からの御報告でもよろしいですか。申し訳ありません。それでは、まだたくさん御意見があるかと思いますが、ちょっと予定しておりました時間も過ぎております。それと私の時間の調整が不十分でちょっとこんな時間が延びてしましまして大変申し訳ありませんでした。ちょっとまだまだ御意見あるかと思いますが、今日の意見交換をここで終了させていただこうかと思っております。冒頭の市長の御挨拶にもございましたが、不登校に関しましては小中学校9年間だけの問題ではなく、就学の前後を問わず、発達障がいや子育ての支援のあり方なども大きく変わってきており、教育と福祉の連携が重要になって参ります。本日ちょうだいいたしました多くの貴重な御意見を参考にさせていただきながら、市長事務局と教育委員会事務局とが同じ方向に向かってこれまで以上に連携を深めていければというふうに考えているところでございます。最後に市長から本日の講評となります。お願いいたします。

#### ○井上市長

今日は長時間にわたりまして、たくさんの御意見をいただきまして本当にありがとうございます。また、萬相談員、木村センター長、本当にわかりやすく貴重な方向性、取り組みを教えていただきましてありがとうございました。非常に大きな参考になるんじゃないかなというふうに思っております。教育委員の皆さん方から貴重な御意見をいただきましてありがとうございました。総じて、私が聞いていて感じるのは、染原委員、宮崎委員もおっしゃいましたけれども、やはり、どうも今すばらしい取り組みであるのと同時に、やはり少し時期が遅いのかなという、いわゆる事象化してしまって、もうその時期におよんでしまって、ある意味じゃ不登校という現実が起こって、その対応に追われておると、1つの後追いなものかもしれないという気もいたしました。

今、行政の方では、実は昨年度から様々な子育てに取り組んでおられる民間のボランティアの方々、そういう方々と担当所管の職員、私ももちろん入りますし副市長も入って、いろいろ意見交換をやって、ざっくばらんな話し合いもやらせていただいております。もうこういったところで現実にそういった子育て支援に取り組んでおられる方々の話を聞きますと、行政がやっていることとはちょっと違うんですね。行政は行政で決められたことやっていますけれども、今の若いお母さんたちはどちらかというとSNSで子育てをやるというふうな状態の中で、今この2人の説明を聞いていたら、やはりそういった育て方で、子どもに自尊感情が湧いてくるのか生まれてくるのかという、そういった問題もあろうかと。ただ、子どもの育ちを見守っていただけという観点から、それが1つの子育てという範疇に入るかもわかりませんが、やはり子どもの情操とか、そういったことを考えたときに、やはり一方では、経験の豊富な方々の御意見を聞くことも大事なことのようないきがいたしております。先日は教育長も来ていただいて、そういった民間の子育て支援の方々との交流会と一緒に入って、私も入って、意見交換をやらせてもらいました。こういったことをもう少し広げていきながら、行政では手の届かないところ、行政がやるべきことやっているんですけど、それだけでは改善できません。あくまでも法律で義務づけられたこと、条例で決まったことをやってるだけではなかなか、今の保護者のそういった

子育てに対するいろんなサポートには繋がりにくいというふうに感じておりますので、そういった民間の方々から今どこにどういう課題があるのか。できれば、こういった相談員の方とか、センター長、こういう実際に取り組んでおられる方々に、保護者の方々に、そういったこれから保護者になろうとする方々に、いろんな事例を伝えていただいて、就学前から、保護者の方たちの意識を少しずつ変えていくようなことも必要なのかなということも痛切に今、感じました。これからお2人のお力、また教育長、教育委員の皆様方のいろんな御意見も聞きながら、そういった行政の手が届かないところに、どういう形でやっていくか、民間のボランティアの方々の力を借りていくことも1つの方法だと思います。そういったことも含めて、こういった将来的な不登校対策になればというふうに思っておりますし、また子どもの成長や子育てにも、繋がってくるんじゃないかなというふうに思っております。ぜひ今日の総合教育会議の意見を参考にさせていただきながら取り組んでいきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。本当に貴重な御意見ありがとうございました。

○藤井部長

以上をもちまして、令和5年度第1回の春日市総合教育会議を終了いたします。この後、教育委員会の皆様におかれましては、定例教育委員会を開催されるということでございますので、引き続きよろしく願いいたします。本日はどうもありがとうございました。

閉会 午前10時50分